

書評

マインド・ザ・ギャップ! 現代日本の学力格差とその克服

志水 宏吉 編著
高田 宏一



大阪大学出版会
3024円
06・6877・1614

学力向上は、学校教育の使命である。長年教育現場で実践した者として、子どもたちの学力格差を縮小・克服することは難題であった。全国学力・学習状況調査の結果を基にその向上を早期に求める気運は一層高まっております。学校も教育行政も一生懸命である。本書は、こうした教育現場などにとって参考になる書であると思う。

まず、1989年、2001年、2013年の3時点比較という12年ごとの極めて長期にわたる研究であることに驚く。

また、学力格差克服の筋道や方向性が、展望のある形で提案されていることをうれしく思った。本書は、著者の言葉で言うならば、いわゆる「温かい知」の産出を求めて編まれている。

第一部では、大阪学力調査の3時点比較、子ども、家庭、学校、地域とのつながりと学力の関係など、第二部では、授業改革、学び合い、人間関係づくりの教育実践は学力格差を縮小するかなどが記されている。

第三部の学力格差を一定程度克服している大阪の「効果のある学校」の特徴と持続の要因や本書全体のまとめ等は、教育現場にとって読み応えがある内容であると思う。

最後に補論として、日本で実施されている学力調査の欠陥とその克服などが記されており、興味深く読んだ。

(谷 智子・高知学園短期大学教授)

「温かい知」の産出求めて

子どものスマホ・トラブル対応ガイド

安川 雅史 著



ぎょうせい 2160円
03・6892・6666

保護者・教師に向け解説も

「教師も、保護者も『わからない』『ついていけない』で済まされる時代ではありません。子どもたちをいじめの被害者にも加害者にもさせないために、また、犯罪に巻き込ませないために、しっかりと今の子どもたちの現状を把握し、対策を立てていかなければなりません。この本が今後の生徒指導や家庭教育に役立つことを願っています」

著者は全国webカウンセリング協議会理事長。北海道立高校教諭、私立高校教諭、同協議会理事を経て、2006年に同協議会理事長に就任。2千会場以上で講演会を実施、受講者数は40万人を超える。

内容は具体的に読みやすい。特に第4章の「ネットいじめに対応する上での留意点(教師の皆さんへ)」「スマホ時代の子ども向き合う(保護者の皆さんへ)」は必読である。

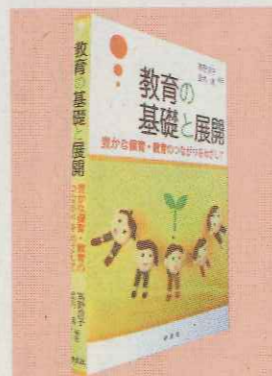
「困ったときの相談先」一貫は親切で、都道府県いじめ相談窓口、子どもの人権110番(各地法務局)、都道府県警察本部サイバー犯罪相談窓口の一覧の他、文科省、法務省、弁護士会の窓口案内もある。

知識を確かなものにするには、複数読書が有効である。「スマホ時代の親たちへ」「わからない」では守れない(藤川大祐著・大空教育新書)も読む。著者は千葉大学教育学部教授、文科省「いじめ防止基本方針策定協議会」委員を務めた。

(海老原 信考・元千葉県立高校校長)

教育の基礎と展開 豊かな保育・教育のつながりをめざして

高野 良子 編著
武内 清



学文社 2160円
03・3715・1501

ジェンダー論など多様な視点で

幼(保)小連携が強調されて久しい。小と特別支援学校連携についても同様である。だが、双方とも相互理解がどれほど進んでいるかとなると、気掛かりな面がないでもない。

幼(保)と小を一セットにして、乳幼児期から児童期にかけて把握する好善はないか探してみたい。「あった」、それが本書である。幼(保)と小、特別支援学校を内円に置けば、外円は地域社会や生涯学習社会か。その全てに目を向けてまとめたのが本書。その副題は「豊かな保育・教育のつながりをめざして」(41頁)の辺りで「家庭教育」についても論及。ここで、従来の家庭教育論でいいかを考えた。ジェンダー論(第9章)の視点からも……。

「多文化共生と教育」(第10章)にも、注目したい。自文化中心主義の克服を、教師や保育士がいかにするかが、課題となっている。評者は、この章をまず読んだ。このことから、本書(全12章)は、読者の必要関心事から読み始められる構成だ。

教育社会学の研究者として知られる2人の編著者を中心に、各分野の専門家が執筆。幼稚園、小学校、特別支援学校教諭と保育士の仕事と、学校、幼稚園、保育所(園)の役割の一層の理解。これは、全ての教育者、保育者に求められていることだろう。

(飯田 稔・千葉経済大学短期大学部名誉教授)

教務主任の仕事整理術

安野 功 著

限られた時間で最大の効果を!

先手打ち、チームで課題解決

「無理」を見つけて、明確にし、先生方の教育予備の管理簿の管理名高い「見越」を、チーム、この信、一読して



100年後見据え教育環境を「転換」



みよし・まさあき 同志社大卒。福山市立二ツ橋中学校校長を経て平成26年から現職。58歳。

第3木曜日午後を一言研修日として、112校の全教職員が研修を始めています。中学校は、学校の枠を超えて教科ごとに教員が集まり、授業参観や教材研究をしています。小学校は、この間、国語・算数に偏っていた研究教科を市全体のバランスを考慮して学校ごとに分担・固定化することで、全教科の研究が継続できるようにしました。7月実施のアンケートでは、約9割の教員が「研修での学びが授業の改善に役立っている」と答えております。

「福山100NEN教育」は、小中一貫教育の取り組みです。

子どもたちは、時々さまざまな顔を見ますが、一人残らずみんな、悩まながらも、必死に伸びようとしています。問われているのは、常にわれわれ大人であり、大人こそ最大の教育環境であると思います。合言葉は、「すべては子どもたちのために」です。全力で頑張っています。

三好 雅章 広島県福山市教育委員会教育長

広島県福山市は今年7月、市政施行100周年を迎えました。教育委員会では、次の100年へ、さらにその先の未来に向かって、子どもたちの学びをより確かなものにし、「福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる」とを、「福山100NEN

教育」として取り組みを始めた。平成10年、当時の文部省から県教委と本市教委は、学校運営に対して是正指導を受け、信頼される公教育の確立を目指して取り組んできました。

変化の激しい先行き不透明な時代において、あらた

めて「是正指導の意味を問いつ直す」ことにより、公教育の基盤をより確かなものにし、教職員一人一人が伸びやかにその力を発揮し、日々の授業づくりに取り組んでいるところ。昨年度初め、小中一貫教育の全面実施に当たり、「3つの転換(授業・組織

次回は山本和紀・京都府長岡京市教委教育長

み